

会報
峠
とうげ

河井継之助記念館
友の会会報
第33号
2023.5

〈編集・発行〉
河井継之助記念館
新潟県長岡市長町1丁目甲1675-1
〒940-0053
Tel.0258-30-1525
Fax.0258-30-1526
頒布価：50円（送料別）

〈編集人〉
荒木法子 恩田富太
白石恒夫 中野武夫
友の会事務局
〈構成・印刷〉
高速印刷株式会社

継之助と虎さん、そして…

長岡のまちを動かす生命体（意思）の連鎖

友の会 河村 正美

「虎さん派のおめさんに頼んでわりろも…」と前河井継之助記念館館長の稲川明雄さんに言われたのは、六年程前のことだった。記念館友の会幹事の就任依頼であった。

冒頭の言葉は、私が長岡市の職員時代に「米百俵財団」の立ち上げや米百俵デー・米百俵賞の制定、「米百俵と小林虎三郎展」の開催、英語版『米百俵』の出版などに携わってきたからだ。その過程で難題に直面するたびに稲川さんにアドバイスを求め、直接骨を折ってもらうこともしばしばであった。

だが一方で、私は密かに（でもないが）継之助に強く惹かれていた。『峠』を通してのイメージが中心となってしまうが、その劇的な生き方の中に見える義の心、革新性、突破力、破天荒さ、人間くささなどが織

りなす言動とリーダーシップをどう理解し、どう判断しているのか、一筋縄ではいかない不思議な魅力である。

特に、強い信念を持ちながら思うに任せない時代の渦の中でそれを体現する道を模索する姿には、その結果がもたらしたものを併せて考えると、幾通りもの推断と評価が頭の中を巡るのが常であった。かつて継之助嫌いだっただという稲川さんは、そうした私の思いを知っていて声をかけてくれたのではないか。

そんな私などには手におえない継之助ではあるが、例の、虎三郎の家の火事見舞いに駆けつけた継之助に對してせめてものお礼と称して虎三郎が継之助のやり方を批判し、継之助も「虎には困ったものだ」と苦笑しつつも感心したというエピソード

は、共にひいきの私を満足させるお気に入りの話である。

そう言えば、『米百俵』の英訳を引き受けていただいたドナルド・キーンは、もともとは友人である司馬遼太郎の『峠』を通して河井継之助に関心を抱いていたが、長岡市の市制九十周年事業のシンポジウムに参加して小林虎三郎にも興味をもった。これを聞き、これ幸いと『米百俵』の英訳をお願いして実現したといういきさつがある。

ついでに言えば、山本有三の戯曲『米百俵』の誕生にも継之助の導きがある。昭和十四年に長岡出身のドイツ文学者星野慎一が山本有三を訪ねた際に、三国同盟に反対する山本五十六を称える会話から発展して、継之助、虎三郎に話が及んだという。

「山本次官が私淑する継之助をぜひ小説に」と星野慎一は切願したが、時局を憂慮する有三は、「戦争に踏み切ったところがどうも引っかかる」とし、長岡に来て虎三郎の調査研究を始めたのであった。



河井継之助



小林虎三郎
(興国寺蔵)



三島億二郎
(長岡市立中央図書館蔵)

こうして眺めると、河井継之助、小林虎三郎、さらに言えば近所の幼なじみで二人の没後、その思いを体現していった三島億二郎を加えた三人は、個々に存在するのではなく、長岡という脳細胞の中で一つの意思をもって生き続ける生命体としてつながることではじめてその本質が見えてくる気がする。

継之助、虎三郎、億二郎…、一見違うベクトルをもつように見える先人たちを併せて自分の心に生かし続けようとする市民が多くいる長岡は、まさに司馬遼太郎の言う「分の厚さ」をもった人たちで支えられているまちだと自惚れることのできる幸せを感じている。

河村正美

(かわむらまさみ)



昭和二十九年長岡市生まれ
昭和五十二年長岡市役所入所
現在、公立大学法人長岡造形大学副理事長、
NPO法人市民協働ネットワーク長岡副代表理事
趣味は路地巡り、寺巡り、美術館巡り

開館十六周年記念講演会

外山脩造と三島中洲および渋沢栄一

— 河井継之助 人脈とその系譜 —

令和四年十二月十一日開催（於・長岡グランドホテル）

講演ダイジェスト



講師の松本和明さん（京都産業大学教授）

● 三人の生い立ち

三島中洲の生まれは現在の岡山県倉敷。三島家というのは里正、つまり庄屋の家です。中洲は最初は侍ではありませんでした。山田方谷が書いた漢詩に感動して方谷が主宰する牛籠舎に入り、十八歳のときには塾頭となったということです。そして方谷に「侍にならないか」と勧められ、江戸に行かせてもらうことを条件に認められて松山藩に仕官します。つまり、武士の身分を得ることになりました。

その翌年一八五八年、昌平坂学問所に入り、佐藤一斎などから学びを得ますが、この学問所には外山脩造が寅太の時代に学びに行っているの、その辺りから実は関係性が出来始めていったところなんです。

外山脩造は栃尾郷小貫の出身で、この外山家も里正の家で侍ではあり

ませんでした。

外山は井上五蔵の下で学び、長谷川泰と出会っています。そして一八五八年に江戸に出て、清河八郎に学び、その年の冬に河井継之助に出会います。翌年一八五九年に長岡藩の山田愛之助に学び、そしてその後江戸に出て塩谷宕陰に学ぶ。

ここまで出てきた人たちが、師弟関係であるとか同門であるとかというところで、いわゆる学びのネットワークがかなり早い段階から構築をされてきたということはポイントだと思えます。

そして渋沢栄一ですが、渋沢も元々は武士の身分ではありません。農業や養蚕、藍玉の加工販売を手掛けるなかでビジネス感覚や地域のリーダー、まとめ役の経験を積んでいきました。

そのさなかに岡部藩の侍に侮辱され、「もうこうい時代はいかんぞ」

と、今の体制を変えなければならぬ、官尊民卑は良くないと……官が上で民が下ではないんだということが、彼の長い人生のなかでテーマになっていきます。

尊王攘夷、あるいは討幕運動を手掛けることになり、幕府にばれ、京都に逃げ延びる。そこで出会った平岡四郎に、一橋慶喜が優秀な人間を求めているので仕官してはどうかと言われます。

渋沢は幕府から追われていた訳ですが、外からではなく内側から変えていこうと仕官をし、一橋慶喜家の領内の財政改革で頭角を現していくことになりました。

● 戊辰戦争、その後

幕末動乱のなかで、慶喜と近い松山藩は岡山藩に攻められそうになります。交渉を重ね、攻め込まれるのは回避しましたが、明治に入ると減石され、非常にしんどいことにな

● はじめに

今回の講演会の主人公は三島中洲と外山脩造です。そしてこの二人とビジネスの世界のみならず、社会貢献、地域貢献という世界でも様々な関係を取り結び、深い仲を持つこととなったのが渋沢栄一です。

ります。

中洲はこのなかで明治政府に出仕することとなりますが、漢学儒学仲間でもあった、初代大審院となる玉乃世履に勧められ司法省(現法務省)に出仕します。

外山は新町口で河井が撃たれるところに直面します。河井は撃たれた後、「人が聞いても傷は軽いと言っておけよ」、あるいは「刀をよこせ、首だけは敵に渡さんでな」と述べたと外山が振り返っています。

外山や、あるいは大崎彦助だとかを会津若松から仙台にやり、船で外国に渡そうという計画が種々ありましたが、結局出来なかった。それについて『河井継之助傳』の作者である今泉は「不幸生残の藩士中、能く継之助の遺志を継承する者なく、為に外国行のこと、遂に之を果すを得ざりしは、眞に千秋の恨事」と厳しい評価をしています。非常にこれは、一つの案件だったということをお話しておきたいところです。

洪沢は大政奉還の前後はパリ万博の使節団としてフランスのパリに赴

いていましたので、巻き込まれずに済んでいます。

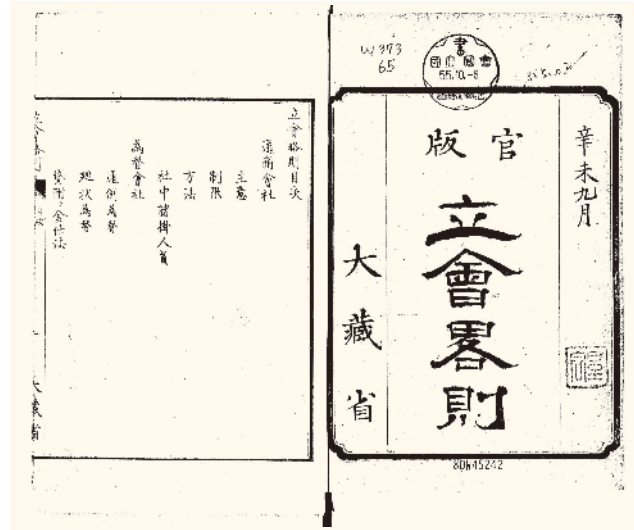
様々な知見を重ねていくなかで、日本が近代化をしていく、日本のためにはビジネスが重要ということを感じます。そのためには商人が社会的地位を上げ、尊敬されるような存在にならなければいけないということを深く学び帰国します。

そして帰って早々に静岡に幽閉されていた主君の慶喜と会い、これからは社会のために尽くせという言葉ももらいます。

● 洪沢の活躍

洪沢は静岡の地で商法会所を立ち上げます。その後、井上馨あるいは大隈重信に勧められ民部省(その後大蔵省)に入り、日本経済や産業の基盤づくりにいそしむ——『立会略則』であるとか、銀行制度、国立銀行条例ですよね。あとは近代の複式簿記の導入には長岡藩出身の若者が関わっています。

その後大蔵省を後にし、第一国立



『立会略則』(国立国会図書館デジタルコレクション)

銀行を設立します。そして全国に銀行を作ろうという動きが澎湃と出てくるなかで、直接的に関係したり、間接的に協力をしています。特にここ長岡の第六十九国立銀行には非常に力を込めました。

● 外山と洪沢の関係

外山は小林雄七郎に勧められ、大蔵省に出仕します。複式簿記の解説普及や国立銀行の検査・調査です。第一国立銀行の検査に入るなかで、洪沢と認識を得、より交流が深まってきます。外山は洪沢から「民間に

福島甲子三

安政5年(1858)12月27日、鬼頭少山の第3子として長岡城下に生まれる。
 明治6年(1873)、長岡会社病院の薬局生として勤務。
 明治15年(1882)、福島家の婿養子となる。
 明治16年(1883)、千葉県職員に採用され衛生課で勤務。間歇(かんけつ)病の調査研究に打ち込む。
 明治31年(1898)9月、東京ガス株式会社の支配人となる。
 大正4年(1915)、宝田石油の専務取締役任に推される。
 大正8年(1919)、長岡孔子祭典会を組織し、さらに斯文会(しぶんかい)長岡支部を結成する。
 昭和15年(1940)、83歳で病没。



福島甲子三
(宝田二十五年史より)

小林雄七郎

弘化2年(1845)12月23日、小林又兵衛の七男、虎三郎の末弟として長岡城下に生まれる。
 文久年間(1861~1863)、江戸遊学。横浜で英語を学ぶ。
 明治3年(1870)5月、慶應義塾に入り、福沢諭吉の指導を受ける。
 明治4年(1871)5月、高知県の海南校で英語を教える。
 明治5年(1872)5月、東京へ戻り、大蔵省の紙幣寮に勤める。
 明治6年(1873)、『銀行簿記精法』(共訳)を刊行。
 明治9~22年(1876~1889)、『百科全書法律沿革事体』、『日耳曼国史』、『ナポレオン第一世伝』の翻訳や『経済学講義』、政治小説『自由鏡』、国会議員となる所信を示した『薩長土肥』を刊行する。
 明治23年(1890)7月、第1回衆議院議員選挙に出て当選
 明治24年(1891)4月、腎臓炎に尿毒症を併発し47歳で病没。



小林雄七郎
(興国寺蔵)

向かってほしい」と勧誘を受け、一八七九年に大阪の第三十二国立銀行に総監役として向かいます。

●外山の活躍

外山は大阪麦酒、そして阪神電鉄の初代社長と様々幅広くに活躍をします。あとは大阪銀行集会所や手形交換所ですよね。手形交換所を重視し全国に置いていくというのも、ひとつの成果ということはいいたいと思います。

『外山翁傳』によると、外山は自分があればこれではなく、信任する人物を配置してこれに任せきりで干渉しない。一方で、決して私人の営業とすなわち、国家事業の心得でやれと。世のため人のために基軸としてビジネスを行う必要があると。適材適所の人材を発掘し、あるいは人材を育ててその人間に任せるといのが非常に巧みでした。

その辺りは渋沢も同様だったので、非常に重なるところというふうに見るべきだと思います。

『外山翁傳』には渋沢による回顧がありまして、「ごく親切で質実剛直、非と思つたことは例え偉い人で

あろうとも先輩であろうとも遠慮なくその説を述べる。且つ物事を緻密に考える人」。一方、別のところではこう言っています。「徹頭徹尾まじめな一本調子の人で、大蔵省にいるときに懲慥しやうようして実業界に入つてもらつた。色々大阪の發達に功勳のあつた人だ」。

ただ外山は晩年、病気をしますその活躍が十分果実を見ぬまま残念なことに亡くなつてしまつたのは惜しいということはいわれています。

●中洲と渋沢

—— 論語と算盤

渋沢の古希のお祝いに、福島甲子かし三ぞうが發起人となり書画帳をお贈りしようということになります。

そのなかの一枚の絵に、『論語』『算盤』『刀』『シルクハットと白手袋』が描かれています。論語、算盤、刀、これはいわば武士道とまではいかないまでも、そういった精神性の象徴、そしてシルクハットと白手袋というのはやはり西洋の新しい文明ということを表したものでしょうから、非常によく出来た絵だと思えます。

左側に、小山正太郎（※）による讚

※長岡藩医・小山良運の長男



小山正太郎 画
(渋沢史料館所蔵)



明治36年頃の二松学舎 校舎
(二松学舎大学所蔵)

が書かれています。「論語を礎として商事を営み、算盤を執て土道を説く、非常の人、非常の事、非常の功」。小山の絵を見た中洲は感銘を受け、洪沢に詩文を寄せ、また様々交流が深まっています。

中洲は「義利合一」を提唱します。正義の義・仁義の義と利益・利潤の利ですから、ある意味で言うところ、「論語と算盤」、あるいは道徳や経済合一というような洪沢のスタンスと非常に重なるところは注目すべきところではないかと考えます。

やり取りを進めていく中で洪沢も年齢を重ね、実業界から基本的にはリタイアします。それまで洪沢があちこちで話してきた理念やスタンスをひとつまとめようと、一書が刊行されます。そのタイトルが『論語と算盤』でした。



当日は251名の聴講者が来場されました。松本先生のユーモアをまじえたお話に笑い声があがる場面もあり、講演会はなごやかに進行しました。

「論語と算盤」はその後洪沢を象徴する言葉となりましたし、現在も様々な場面でこのフレーズが洪沢を象徴するというところで使われていますが、この辺りが一応の発端だったと見るべきです。

そして中洲は東京で二松学舎を立ち上げます。いわゆる私塾という展

開でしたが、それでは運営基盤がうまくないということで、運営基盤、経営基盤となるような組織として二松学舎を立ち上げます。その会長に就任したのが洪沢です。

翌年に中洲は亡くなってしまいましたが、洪沢は告別の辞を奉呈しています。

そして翌年、この二松学舎は二松義会をベースとして法人格を得ることになり、洪沢は舎長という今でいう学校法人の理事長というふうなポジションに就任をします。その後一九二〇年以降というのは日本の景気が激しく落ち込むタイミングでなかなか大変だったようですが、本当に最晩年の洪沢が、この二松学舎の運営を支えていくこととなりました。

●最後に

本日お話ししましたとおり、まだまだ課題山積でございます。これは私の課題と共に、河井継之助研究あるいは河井継之助の足跡、人物像、実績というのを見ていく上でも、まだまだやるべきことはあるかと思えます。

私は長岡の仕事は何を置いても第



会場外では人物紹介や人物相関図などのパネルが設置され、皆さまじく読んでいました。

一にやるということを宣言しております。そこも含みまして、ぜひよろしくお願したいということでは読み終わりといたします。

ご清聴感謝いたします。ありがとうございました。

(まとめ・河出)

※講演内で主に三島中洲・外山脩造・洪沢栄一について触れている部分をまとめました。

また、小林雄七郎、福島甲子三の年表は『ふるさと長岡の人びと』(長岡市発行)を参考にしました。

館長が行く

「館長、阿弥陀寺案内しますよ」。早頃から友の会の川上幹事から声をかけて頂いたが、漸くその日が来た。令和四年十二月四日(日)、川上幹事の車に同乗し、長岡市濁沢町の阿弥陀寺へ向かう。当館より南東12・4kmの道なのである。村松から太田川の溪谷の道を通り、山奥へ進む。枝道の細い坂を車はス

イツチバックのように上り、険しい山腹に阿弥陀寺(山号静慮山。曹洞宗)があった。早速本堂でお参りし、その後右手の苔むした古い墓を順に確認した。中央大きな墓の右隣の墓の苔をこすると、なんと「月泉大和尚禅師」の名が現れた。思わず合掌した。運命的出会いである。

慶応四年五月十九日、長岡城が落城すると、河井継之助の家族(妻すが、父代右衛門、母貞)は、古志郡村松村の知人を頼って避難した。しかし、西軍が来襲し発覚を恐れて、さらに山奥の濁沢村へ移ることになった。そして、ある人物に河井の家族を匿うよう切に頼んだ。その人物は阿弥陀寺の住職の神田月泉である。月泉は長岡藩の河井継之助の家族を匿えば自らの生命財産に災難が及ぶことを承知で身を捨て、喜んで承諾し阿弥陀寺に預かった。濁沢は桑名藩の預かり地で領分は違いますが、

村の人たちは、河井の一家と聞いてお気の毒なことだと何くれとなく心配した。特に住職の月泉は真心を尽くして庇護した。

しかし、河井の家族が潜伏している噂が西軍に漏れ、諜者が頻繁に寺の中を伺った。月泉は隠し通せない悟り、先手を打って荷頃の西軍の本営に赴き隊長に「河井継之助の家族を当寺に匿っている」と注進し、「恩賞の代わりに河井の家族の生命を保証せよ」と迫った。「敵と味方となり戦うのは各藩主のために尽すのであり、河井を憎むあまり家族まで斬殺することは、武士たる者のすることではない」と乞い願った。盤石隊長は月泉の熱意にほだされ願いを許し、自分の間河井の家族を預ける証書を渡した。

月泉は喜び阿弥陀寺に帰ると、妻はすでに死を覚悟し髪を断ち西軍兵士の到来を待っていた。月泉は、河井の家族を預かる依託を受けたが、自分の落ち度で妻が姿を変えたことを盤石隊長に申し出ようとした。しかし、すでに陣を移し行方が分からず、長州藩の本営に向かった。月泉は、その隊長に今までの経緯を伝えた。隊長はとても驚き「河井の家族が濁沢村にいと密告があり、本日小千谷から捕縛に向

かったはずである。速く寺に戻らないと必ず災いが家族に及ぶだろう」と言った。月泉は慌てて阿弥陀寺に帰ったが、捕吏数十名が寺を囲みもう捕縛されていた。月泉は声を震わせ「当寺は恐れ多くも先帝の御位牌が祀つてある。この狼藉は何事だ。西軍の兵の信義はどこにある」と叱咤した。捕吏は呆然委縮した。月泉は盤石隊長の預かり証を示して釈放を願う「もし小千谷に強引に連れて行くのなら、私宛に預かり書を差し出すのが筋である」と訴えた。捕吏はやむを得ず従ったが、河井の家族はすぐに西軍に引渡され、青竹の唐丸籠に乗せられ、罪人のように残忍な苦痛を受け小千谷に引かれ、それから長い道のりを高田へ護送され拘禁された。継之助の母は「西軍からみ



阿弥陀寺の本堂とお墓



阿弥陀寺から眺めた濁沢



月泉のお墓

れば謀反人の家族として虐待を受けることも無理もないかも知れないが、婦人どもまで苦しみを受けるのかと思うと、本当に涙が止まらなかった。翌二年の春には無事に長岡まで戻れたが、この苦しみは今でも忘れられない。」と回想した。

阿弥陀寺に眠る月泉の墓から集落を臨むと、月泉和尚が自分の命を懸けて西軍を説得し河井の家族の生命を助とうとする勇胆な所業が伝わってきた。

(中田)

「塵壺」を読む

31 連載

本庄は佐賀と町続きになっている。「彼は八ッ過也」とあるので、本庄には十四時過ぎに到着したようだ。次の目的地である諫早へは、船に乗っていくことになる。

反射炉を作る人物の名を聞いたが忘れてしまった。「横尾小次郎ハ死タリ」……と、長崎にて秋月悌次郎に聞いたとある。

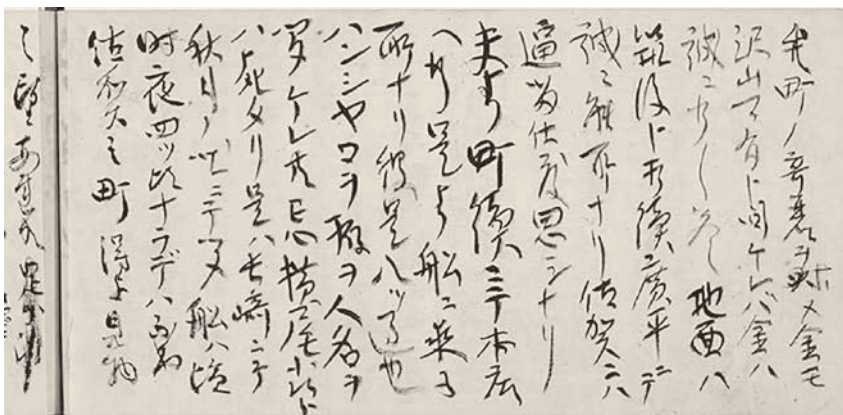
余談だが、継之助が長崎の地に到着したのは十月五日、塵壺にはその翌日六日から十六日までを、日付と天気、宿を移したとと蘭館を見たことのみ簡素に記録している。長崎逗留中のことは合わせて記す、として十七日の日付でいろいろな図や長文をしたためており、秋月との交流の様子も多く記されている。そのなかで継之助は稲佐に建つ製鉄所に触れ、金と時間のないことを理由に見物しなかつたのは残念だったと悔んでいる。しかし秋月はその製鉄所を見たいので、そのときの製鉄所の稼働する様子を感じしながら継之助に聞かせた。彼は漢学生であるためあまり心に留めず……と前置きをしながらも、継之助は秋月の聞かせてくれたことを記している。きつと、そ

の話のなかで反射炉についても話題に上がったのではないかと思う。万延元年（一八六〇）四月十八日付で両親に宛てた書状のなかにも、長瀬の山田方谷のもとを辞したあとに油野村の木下万作という人物のところに行き、製鉄の仕方を見物したとある。製鉄は継之助にとって深い関心事だったことが窺える。

話を安政六年（一八五九）十月四日、本庄に戻す。「船ハ塩時夜四ツ頃ナラデハ不出」とあるので、潮の関係で船の出る二十二時頃までは時間があった。佐賀の町をじっくり見たい気持ちがあったようだが、歩きどおしだったためなのか、疲れて面倒になり、船宿で休息をとっていたところが「七ッ半前」、十七時前頃になると台持の音が聞こえてきた。外に出てみると、例の反射炉で作った大筒を引いているところだった。継之助はそれを見て疲れも吹き飛んだのか、後ろからついて二三町ばかりあるところまで行ってしまったようだ。約二〜三百メートルくらいはついていったことになるだろう。そんな継之助を見兼ねたのだから、役人に問われることとなる。「何れ

之御方候哉」——いずれのお方でしようか。

継之助はよほど反射炉で作った大筒に心を奪われていたのか、刀を差していなかった。それに気づき無刀を恥じ、名も名乗らずに宿へ戻った。
(河出)



塵壺(長岡市立中央図書館所蔵) 安政6(1859)年10月4日条

遠方からの客人

インタビュー 28

● インタビュー ● 神奈川県にお住まいの下山陽太様



令和4年5月10日

● 継之助を知ったきっかけは？

小学生のときに「その時歴史が動いた」ではじめて河井継之助を知り、その頃から興味をもっていました。

● 来館されたご感想は？

今回、映画「峠—最後のサムライ」上映にあたり、夜行バスを利用して長岡に来ました。山本五十六記念館でも、山本元帥が河井継之助の影響を受けていることを知りました。

薩長に対して、ガトリング砲を備えながら永世中立を目指したところがすごいと思います。しかし、時の流れに巻き込まれていった彼の人生には同情します。

もしも、戊辰戦争がなければ、ここ長岡や河井継之助がどうなっていたのか、とても気になります。

記念館近況報告

▼この度、館内からお庭へ降りる階段が新調され、手すりがつきました。これから緑の繁る季節となります。来館の際には、ぜひおもかげのお庭を肌で感じてみてください。

▼二月二十七日～三月七日の間に開催された第十六回越後長岡ひなものがたり。当館で今回展示したのは、和島地域の方が製作された「つるし雛」。大きくてきらきらしていて、来館者も「大きいね！」と驚かれています。

▼入館チケットのデザインが変更になりました。

▼令和五年四月一日より、毎週火曜日が休館日となりました（祝日の場合は翌平日）。また、年末年始は十二月二十九日～一月三日が休館日となります。

▼令和五年四月より、今井事務長が着任しました。



河井継之助記念館 友の会について

会員の交流や情報交換を通して継之助について学び親しみ、記念館を応援する会です。

●会員数 / 正会員 425名 協賛 43名 小・中学生1名 顧問 2名
合計 471名（令和4年度会費納付済）

●特典 / ①入会時に徽章贈呈 ②友の会会報「峠」配布
③交流研修旅行の案内・参加 ④催事案内・参加

●入会手続き / (入会金千円が必要となります)

- ①申込書に入会金と会費を添えて、事務局へ持参。
- ②申込書を事務局へ送り（郵送、FAX）、入会金と会費は銀行振込または郵便振込で納入。（手数料は本人負担となります）

会員募集中

●会費 / ※会計年度は3月31日まで

- ・入会金 / 千円（新規入会時のみ）
- ・年会費 / ①正会員 / (ア)小中学生：500円 (イ)高校生以上：2千円
②協賛会員 / 一口5千円（法人の他、個人でも可）

●口座について

- ・加入者名 / 河井継之助記念館友の会
- ・口座番号 / 郵便局 00560-9-96432
長岡信用金庫本店営業部 普1032829 ※郵便局の場合は払込用紙が事務局にありますのでご利用ください。
第四北越銀行長岡本店営業部 普1764663
大光銀行本店営業部 普3011256

●友の会事務局 / 河井継之助記念館

友の会ホームページアドレス <http://tsuginosuke.net/>

「会員の声」大募集!

本誌では会員の皆さんからの寄稿を募集しています!

継之助への想いや自分が調べたことについてなどを投稿してみませんか?

原稿用紙を送付しますので、まずは事務局までお問い合わせください。



お庭に続く階段を二か所に設置しました

編集後記

●今号の講演録は前回の文字いっぱいになってしまった反省を活かして、写真を多めにしてみました。初見の写真はありましたでしょうか？事務局では新メンバーが二名はいり、四月より新体制でスタートしています。今年度は感染禍によってこれまで中止が続いていた研修旅行も催行予定となっています。また、記念館で「お茶会」も計画しています。友の会の皆さまには行事案内をお送りしますので、今しばらくお待ちください。

（事務局一同）

新入会員ご紹介

（令和4年6月16日から3月31日まで）

櫻井 繁	新潟県長岡市	枝並 正則	新潟県新潟市
栗本 哲平	神奈川県相模原市	三条 雅美	新潟県長岡市
横本 昌之	新潟県長岡市	三条 正樹	新潟県長岡市
中野 隆	埼玉県川越市	三条 正登	新潟県長岡市
九里 廣志	山形県米沢市	盛澤 恵津子	新潟県新潟市
末崎 俊英	新潟県柏崎市	横山 信治	新潟県長岡市
長島 芳子	埼玉県羽生市	濱口 慶一	三重県度会郡
伊野 智彦	新潟県新潟市	小倉 繭	長野県上高井郡
田中 充裕	神奈川県川崎市	石黒 一雄	新潟県三条市
五十嵐 豊	新潟県三条市	高山 武富美	福岡県糟屋郡
松下 二郎	大阪府守口市		

以上21名（敬称略）